

→曾根・岡町の三名士：高橋三千綱、手塚治虫、山田洋次——

2017.9.10(日)カルチャーウォーキング

関西文学散歩第 526 回 参加報告

山田洋次監督の生家でもある「赤い三角屋根のお家」を外から見学する。建物は当時のままだそうだが、新しい方がお住まいで、当然ながら中に入ることは出来ない。この家が、映画「小さいうち」のモデルになったそうで、私は今回の文学散歩を機に、映画の原作となっている中島京子さんの小説「小さいうち」を初めて読み、何年前に観た山田洋次監督の同名の映画のことを思い出した。

そういえば、バージニア・リノ・バートン原作の絵本「ちいさいうち」も、この原作や映画と深い関係がありそうだ。その、いしいももこ訳の絵本が、なぜか我が家の本棚にあり、姉から私の子供たちへのプレゼントだった。この絵本では“ちいさいうち”がまるで人の顔のようにも見え、“うち”の感情が擬人化されて、丘の上に建つ“うち”から見渡す回りの景色が変わっていく様子が淡々と綴られている。“ちい



↑「小さいうち」ポスター(松竹)

さいうち”の回りは開発が進み、高層ビルが立ち並び、いつのまにか住む人もいなくなり“うち”は孤立していくのだ。でもある日、その家を建てた人のまごのまごのまごの……人が通りかかり——と、あとは絵本を読んでいたきたいのですが、絵本にしては 40 頁もある物語の内容は心にしみます。大人も子供も興味深く読むことのできる絵本で、皆さんにも是非お勧めしたいです。

小説「小さいうち」は、その家に奉公に上がった女中「タキ」の視点で書かれ、昭和の初めの中流階級でサラリーマンの平井家で起きるさまざまなことが描かれている。物語でタキは、「女中にとって一番大切なもの、それは掃除や炊事の手際の良さだけではないのだ。ある種の頭の良さのようなものだ」と仕事にプライドを持ち、一家のプライバシーをほとんどを見てしまう立場なので、タキは余計に出しゃばらず、気転をきかせていきいきと働く。

昭和の初めころ、戦争の影響で中止になった「東京オリンピック」のエピソードもおもしろかった。平井家の当主が長い行列に並び、十二枚つづりの入場券を十円で購入。そのときのタキの1ヵ月分の給料の 2/3 の値である。しかも富クジ付で、一等は二千元。家が一軒建つ程の賞金である。だが戦争によって東京オリンピックは中止となり、チケットは残念なことになってしまう。このエピソードのほかにも、タキの料理の腕がすばらしく、物語に登場するお酒のつまみはどれもなかなか美味しそうである。

さて、「赤い三角屋根のお家」見学の後には、大塚古墳と御獅子塚古墳を訪ねた。豊中市内にはなんと 40



もの古墳があり、そのうち公開されているのは 5 つだという。前方後円墳の御獅子塚古墳上に立ち、河合さん、倉垣さんからそれぞれ副葬品などの写真と共に説明を受けた。そして曾根駅へ向かう途中の、僧・行基によって大阪中津に創建され「南の四天王寺、北の東光院」と並び称されたという東光院に立ち寄った。お寺は阪急宝塚線(当時は箕面有馬電気鉄道)の敷設や沿線開発で、中津から当地に移ってきたのだそうだ。

高橋三千綱の小説「親父の年頃」に登場するお寺で、作者が 3 歳で東京に引っ越し、20 数年後に生地を訪

ねて親父との関係を回想するという実話に近いシーンである。息子が、自身が生まれた頃の親父と同じ年頃になって、積年の恨みにも近い感情を埋められるのかという思いに駆られるが、「萩の寺」としても名高い東光院境内のピンクや白の美しい花をながめていると、息子の感情が昇華されていくような気にもなる。そんな思いで新西国十二番札所の観音様(秘仏で当日はお前立)にお詣りをしたが、毎年この2週間ぐらいの後には、道了堂「萩まつり」に祀られている妙覚道了大権現に因む「萩まつり道了祭」が行われるという。美しい萩の花に癒され、「萩まつり」の時にもう一度お参りに来ようかと思っているうちに現地解散となった。今回も実りの多いカルチャーウォークであった。

(記・田原由美子)